

南アルプス市立豊小学校 平成29年度後期学校関係者評価書

平成30年1月30日
豊小学校学校関係者評価委員会
委員長 梅本 澄雄



【第3回 学校関係者評価委員会】

- 1 実施日 平成30年1月26日（金）午後4時から午後5時30分まで
- 2 会場 豊小学校相談室
- 3 参加者

(1) 学校関係者評価委員（4名）

No.	氏名	役職名	備考
1	梅本 澄雄	元本校校長	学校関係者評価委員長
2	吹野 武文	豊地区自治会会長	地域代表 副委員長
3	齊藤 尚子	元本校校長	学識経験者
4	津久井豊徳	元櫛形中学校校長	学識経験者
5	花輪 絹子	児童民生委員	地域代表
6	山田 美紀	平成29年度PTA会長	保護者代表

(2) 学校職員（3名）

No.	氏名	役職名	備考
1	伊藤 正人	校長	
2	深澤 茂弥	教頭	事務局
3	丸山 哲也	教務主任	

4 学校から提案された内容

- (1) 教職員による後期自己評価アンケートの状況
- (2) 学校生活に関する後期児童アンケートの状況
- (3) 学校生活に関する保護者アンケートの状況
- (4) 豊小学校後期自己評価書（アンケートの分析及び改善方策について）

5 協議内容・意見

○豊小学校後期自己評価書に対する考察

（教職員・児童・保護者アンケートの考察／改善方策に対する検証）

(1) 教育目標について

- ・学校教育目標や学校経営方針を常に身近に掲げ、飾りではなく児童に意識化させることが大切である。また、保護者にも学校だより、学年だより、ホームページ等で発信していくとよい。豊小学校の児童の成長のために、学校長を中心にして、組織で「チーム豊」として保護者や地域にも協力を仰ぎながら、コミュニケーションを図り、開かれた学校となるように取り組むことが大切である。
- ・後期職員アンケートの数値は、前期職員アンケートより「A」の数値が増えた。また、保護者アンケートも4項目すべてで肯定的意見が90%を超えている。このことは、学校と保護者の連携が深まり、支え合いができていていることを表している。学校と保護者が願いをもって教育目標の具現化に向けて進んでいくことが、大切である。

(2) 学校経営・組織について

- ・いじめなど重大事件に発展するような問題は起きていないと認識している。ただ大勢が集団で生活するようになると、どこでも起こりうることである。学校、家庭、地域が一体となって、未然防止・早期発見・早期対応を心がけ誠意を持って取り組まなければならない。職員アンケートからは、特別支援教育も含め、「報告・連絡・相談・確認」がなされ、「チーム豊」として協力体制が整い、校務分掌、各組織が専門性を活かして機能向上しているように思う。「よさ」を追究する姿勢が伺える。今後も児童一人ひとりの可能性を信じて、子どもに深い愛情をもち、根気強く取り組んでほしい。

(3) 学習指導について

- ・学級力の向上が学力を支える基盤となり、児童の成長につながるという考えから学級力における課題を明確にして、全職員で協力しながら取り組んでいる様子が伺える。資料から児童の学力が向上していることが理解できる。保護者アンケートの学校生活の項目では、全般的に「1：十分にそう思う」の評価の数値が昨年度より上がっている。学校の取り組みが、保護者の理解を得て成果につながっていると思う。しかし、課題もある。「学校・担任の考えの理解が不十分、あいさつの個人差、見解の相違」などである。学校も家庭も地域も関わり合いから逃げることなく、これからもしなやかにたゆまぬ努力を続けてほしい。また、子どもの内面的学習意欲、学習に向かう力も、子ども一人一人を見て、適切に評価することが大切である。ほめて伸ばすことを基本として接してほしい。テストの点数や数字だけにとらわれず、児童のよさを伸ばす「関わり合い・学び合い」も追究してほしい。
- ・職員アンケートの数値は、前期と比較してほぼ同じであるが、校内研究をベースに意欲的に授業改善を心がけていることが伺える。継続した取り組みを期待する。
- ・家庭学習の必要性が言われている。「家庭学習がんばろう週間」の取り組みを通して、保護者も「言葉かけ・ノートチェック」などの地道な活動を継続してほしい。学ぶ意欲は、共感的に共に学ぶ姿勢で接することで、育てていくことが大切である。
- ・児童アンケートから、どの学年も授業中の発言が弱いということが読み取れる。発言しやすい内容を工夫したり、実態に合った発問を工夫したりすることが大切である。また、失敗を恐れず何でも言える雰囲気のある学級づくりを進めなければならない。児童一人ひとりの居場所のあるクラスづくりを心がけてほしい。主体的な学び、体験的学習に裏付けされた自分の言葉で発言できるように培っていくことが必要である。これからは、根拠に基づいた発言ができる子どもを育ててほしい。しかし、発言だけにとらわれすぎると、授業中も「はい、はい、」と思考を伴わない浅くてうるさいだけになってしまうこともある。自分で考えるということ、今何をする時か考えられることを大切にしてほしい。そして、その考えを発言につなげてほしい。教師は、子どもを信頼して、ときには優しく、ときには厳しく指導していくことが、保護者の信頼に繋がっていくと思う。

(4) 道徳について

- ・職員アンケートからは、道徳授業の難しさが挙げられた。単なる価値の押し付けでは道徳的信条は育たない。道徳は、体験的な学び、価値葛藤、話し合いや討論を通して教師が子どもと一緒に考えることで道徳的心情が芽吹いてくる。また、相手を思いやることは、結局は自分を大切にすることにつながることを子どもたちが心から納得して、自らの生活を見直し、行動に結びつくようにしていく指導が大切である。目に見えない学力だけに、丁寧にそして計画的な指導を心がけてもらいたい。さらに、小笠原流礼法の高さを取り入れ、形式や作法を身につけるだけではなく、言葉遣いや友達との関係づくりにも発展していくことを、これからも期待している。

(5) 特別活動について

- ・資料中の写真から、今年取り組んできた成果が伺えた。運動会は、狭い中でよく工夫された内容であった。文化発表会もそれぞれの学年が工夫した内容で、見ていて感心するものであった。小中一貫教育のねらいのもと、中学生が参加し児童に刺激を与えてくれた。みんなで協力し、精一杯表現している姿がとてもよかった。見る側の改善点として、座布団席を準備したことは好評であった。
- ・行事は、ねらいや目標を明確に定め、児童一人一人が主体的にかかわれるようにすることが大切である。これからも児童の成長につながるような行事や取り組みを行ってほしい。

(6) 生徒指導・生活指導について

- ・朝や下校時のあいさつは、もう一步である。朝、子どもたちと気持ちよいあいさつを交わすことができれば、その日はとても気持ちよく過ごせるのだが毎日ではない。職員アンケートや保護者アンケートからも、あいさつが2極化しているとの意見をいただいた。ただ、あいさつをする気はあっても、苦手な児童がいるように思う。羞恥心であったり、タイミングを逃したりで言いそびれてしまったという児童もいる。あいさつは強制するものではないが、人と人を結ぶ始まりであり、自己表現の一つである。人間関係づくりにおいてはとても大切なものである。今後も継続的に取り組み、ほめることで自己肯定感を高めながらあいさつの意欲化や習慣化につなげてほしい。さらに、学校・家庭・地域が一体になってあいさつあふれる豊地区にしていきたい。

(7) 勤務について

- ・教職員がお互いに力を出し合い、支え合い、協力し合って職務に励んでいる様子が感じられる。学校は組織として、教職員の一人一人がもっている力を発揮してこそ、子ども達の充実した学習や生活指導を行うことができる。校長先生のリーダーシップのもと、月1度の定刻退勤日、年休の年10日以上の実働の取り組みを進めている。仕事と家庭生活のバランスが大切である。これからもさらに推進してもらいたい。
- ・授業と授業とのつながりの中で行事が行われている。授業を工夫することにより、忙しさを何とか克服して欲しい。
- ・「チーム豊」として健康が守れる組織づくりを目指してほしい。

(8) P T A・地域社会について

- ・職員アンケートと保護者アンケートの数値から、学校とP T Aで協力・連携できていることが伺える。今後も常に連携を図り、信頼関係を構築して欲しい。学校も保護者も願うところは子どもの健やかな成長だと思うので、お互いに協力して豊小学校の教育を推進してほしい。
- ・保護者は懸命に生きている。思いとは相反し、児童にさびしい思いをさせている家庭もある。学校と地域と家庭で、さらに連携を深めていく必要がある。
- ・新しい住民も増え、生き方や価値観も違う。だからこそコミュニケーションが大切である。根気よく関わり合って、理解し合うことをあきらめてはいけない。

6 今後の課題

(1) 学習指導について

- ・成果が上がっている。引き続き学力向上のために、学び合い高め合う授業づくりの研究を充実させる。児童が主体的に学び、わかる喜び・学ぶ楽しさの実感できる授業づくりの実践を行う。
- ・「学級づくり」で目指すものは、児童生徒一人ひとりの安心できるクラス、居場所のあるクラスである。学校として目指す方向を職員間で共有していく。

(2) 生徒指導について

- ・子どもたちの健全な育成を図るために、保護者アンケートの記述にもあるように、学校と家庭で連携したあいさつ運動を充実させるなど、学校と家庭が連携・協力して指導の充実を図ることをさらに進めていく。
- ・子どもとの対応で、思いを聞き出したり、考えを引き出すことは難しい。共感的に寄り添ったコミュニケーション力が必要だ。常に学んでいく気持ちで、生涯学習を心がける。
- ・卒業式で、羽織袴を着る児童が増えてきた。普段の生活にはない物、歩行の問題、トイレ、費用など学校としては進められない。

(3) P T A・地域社会について

- ・一人で子育てをしている家庭も多くなっている。生活に追われ、子どもと向き合う時間が削られている。家庭でやるべきことを学校に頼ってしまう。
- ・確かな学力、健やかな体、しなやかな心の育成のために、地域・保護者から信頼される学校づくりに向けて、校長先生のリーダーシップの下、引き続き全職員で取り組んでいく。

- 子育てで悩んでいる家庭も多い。核家族化により高齢者から学ぶことが少なくなっている。高齢者が時として子どもの逃げ場になる。高齢者の存在が心の教育につながっていた。食育の面での問題にもつながってくることだが、保護者も含めて考えていく問題である。
- PTA の課題があるとするれば、主体性をもって改善していく必要がある。役員の割り振り等問題点を明確にし、保護者側から提案していくことが本質である。
- 豊小で続いている養蚕指導を継続していくうえで地域の後継者が課題である。
- 地域の行事を絶やすことは、結果として地域のつながりが希薄化する。誰でも楽な方に流されがちになる。耐寒ラジオ体操なども大変だが続けてほしい。
- 仕事をしていく上で、何事もバランスが大切である。教師が、元気がなく、いつもストレスを抱えたままではいい教育はできない。教育は、人間が相手なのできりが無い。教師が健康で子どもと関わっていくためにも、自分自身で工夫し、バランスの取れた生活を心がけてほしい。